

◆市川市の昔を知る

てこな てんせつ 真間の手見奈の伝説

「手見奈」をイメージし
た文化・芸術振興の
シンボル



これは、今から約1300年前から伝えられている話です。そのころの真間は「真間の入り江」といって、真間山のふもと近くまで入江になっていました。

そのため、このあたりの井戸水は塩けをふくんでいて、飲み水にすることができませんでした。ただ、たったひとつだけ「真間の井」とよばれる井戸からは、きれいな水がわき出していました。

この水をくみにくるひとりの娘がいました。名前を手見奈といっ
て、身なりはそまつでしたが、とても美しく心のやさしい人でした。
若者たちは手見奈をおよめさんにしたいと、きそいました。

手見奈はそのようすを見て苦しみ、「わたしの体はひとつしかありません。ひとりの申し出を受ければ、ほかの多くの人を悲しませてしまいます。わたしはどうしても人を悲しませることができません。」と心に決め、真間の入り江に身をはずめてしまいました。

手見奈が亡くなったことを知り、村人たちはたいへんおどろき悲しみました。村人たちはなみだを流しながら、手見奈のためにおはかを作りました。手見奈は、後に建てられた手見奈霊堂に、今もまつられています。

また、手見奈が水くみをしたとされる伝説の「真間の井」は、手見奈霊堂の道をへだてた向かいにある、亀井院というお寺の庭に残っています。



資料：千葉ふるさとむかし話